山城国
太夫
岩城實記

九三　九四
九五

へ13
3304
12

門へ
3304
12

東京牛込細工町
貸本所 光榮 池田屋清吉

池清

東京 牛込細工町 貸本所 池田屋清吉

大正十年八月廿九日寄
本大學圖書部

正本豫實花奉〜ホ三

目錄

一 汐谷城合戦近信盛威の事

矢篠寿姫の死を悲む事

池清

岩城家伝奏し申さ

沒谷城合戦佐竹義盛の事

玉百寿姫の霊元帝を拝する事

さるほどに乃隆は敵城ふ

つ里へだてゝ中の沢田とりあ

ゝ陣を立へ清軍より島を

つゞせらるゝ南のうらの

兵乱を故実し時の奉天地
ををさめ[illegible]るのさせちらふ
者[illegible]事をわれ[illegible]これを
吟ず故云うしろをあとをと
ゝゝとり俊[illegible]を出して会戦
をしてひしゝとたせられ
ず故に強の[illegible]やぶれをゝ
ゝ敵軍のををうさんぐゝよ

逆寄ををのゝびあと強会
をあつうとりこゝをきりこゝろ
ゝ[illegible]を刈るよるあるば
烟りの下よりゝ蘇のをとをび
うゝゝ逆寄る場をこれで
刈ちゝ山猪熊の軍勢あれ
ば強軍いうでうをなざるべき
村器ぶ伏云てをゝゝ話をれと

りあまりすかりちかよ
無双の強きんゆうにて
陸奥より羽を出し
ひろくたぐひなし
剣を誓ひ陸中もまた
相模を設けて法華のつれ
をはぎこうひ
富強代の士りょくこれまで山
林にかくれ
出羽をそむしんくまで
くらしし
騎とあり
ゆき
きしを
そして
抑も
武田
武勇
千余
騎
雲を
越
方

地をおとしのべれこまごろすは
ちんをかのひしりの堪伏の云
うへ所をとの時分の書とありこと
くくきりくがされのこり
まくあくうちそぶれ郡方事
人の云こふちりくは逃うせ
ほうの四千ばかりさざる軍云は
切りやぶられ討死する云方

雲人参をきれをかり出
さうをあくちりくはありち
しくに屋敷を義逆の罪
人をくを天誅をかりまちる
しあるづくと伝ある人をお
それりくかくくは云の
法師歌のいきちひ廣大ふ
しくを嫡子を申討死のは

をきくよりこれ重盛方へいらり
淀川の船渡めぐり重盛の使者
をいそぎ京へ高うせる法やある
さやうのやうにぶいくぶありと
見まどひふるせん重盛
事をあるのあるべき鬼神
ありとものこちがんりなりとも
いまさどをりをたぶべし

聖りこれ事をうけまりぬ
とる心寝去ねをどのるるうは
うんつるみこるるうちゆう
らみをたらばべしとるの
ちけは法高をあり鬼神を
しとまちらけとりかくて
道隆を法師にして云
やう橋をこの海ことを

切腹せり大よせ方よりせめよ
せめ〻たとへ城郭焼亡
するも君父の仇をうちすす
天をいただくべからざるものを
知道義形して今天誅を
加へ出るの時いたり青木
も皇国なるべしこの命を勅
ものしれこの

道理をうけ聖石をもの
ゝ知るをうけの吳ふべ
形ありて世発よりて
みみ聞るべし中ゝ
れも大よ慶いさぎよき
方様の言葉うかゝ天の道義
佐いうべる記会と都合
地産の先陣をそれこの

高き峯のうたがひあれば他人
まねびるべうもあらず詳義不変し
てまれに先陣より後人をも
隔てまれに相続全身実説の
こゝへ来年のゆくへは拙筆
なりいづれもりとも弱うぶん
方をたゞくづしと年紀り既
まれにいまゞ新意の

きれをる先陣より先陣寄山
長記外結新卯年全身義
のまをあびうして物よ
この沒谷撥ろうろハ
滄海漫〻そして遠嶺峯
をひしゝ青苔つゝありて
いしだみのでとゝ寄ぶゝ
紬りゝ新い碧石とびて

高倉のごとく出羽代
の城ゆゑ掃部頭
を[illegible]
かりそめうの
て義城の豊後
城のよう矢倉をうきつる孫
城の南の方
をう山[illegible]
の時横

矢を射んとうつくりまる
る陰陽をつくれるでき堅
城ありがたやせ見知
[illegible]とそれえざりもり
元亨二年三月九日
のきれ谷より山をうつ上れが
城中の家の後の[illegible]
[illegible]

たるを先陣仕るべし
ば武千金場門をあけ楯の板
をうつぎつれ寄せ
くゆ一つをとられぬまちまち
けるる博奕四方の矢倉より
射出す矢先い雪面のごく味
くくとうも射へをとろて射
よれどゐ拾矢を

く敵いりこびくよ射ちを
ゆるど矢をあるにあるりちあるこ
ゆのくくを先井ゆる徒拝いり
てりあるゆ敵情よりふ
よ生くくあるくび古ひくらん
とあるゆのゆるべきや味方
ゆたちをちるのあきゆ
おくれをるあ

ゆ　たちみ　ぎちんを　ういこみ　見れ
ばつづらとまつ　ぎたくてるを　わそく
せたく　えび　まる　矢先を　ぎわ
をきりく　切りく　あとの　書　物
百年間　ざものしりたる　たく
きなりこの　ことば　ぎまされ
たくさんの　雑の　考すのどもを
百余人　祝れどの　つけどもつゆ

せばわ　ぎさんで　たせのが
る　浄瑠の　会これを　ぎ　先陸
をうたをおしと　千　年人うが
まく　たつ　つ　年　逆　家
見　を　投　を　石　ぎ
を　引　引　見れ　先　ぎ　せの
ぎるの　時　ようこれを　見て
ばぎんいよと　たち人　ぎりある

大石をたてゝ
その書山岳も碎
るよつたんよせる
の云しどの言葉
ひゝぐれみちんよりうせ
よりて跡よりまた
も先陣の敵
れ坂中よりあ
いこれをつんで
ゞりをたゝぶ
昂ゝゝさぶ
一番妖精恐
れて
その
きゝ人
あたゝび

敵い矢番をそろへて面のみをそろへ
射落せば信秋の陣より八の郭まで
で射しそこなうもとりつぎの陣
望みしが養うばとりつぎの塀
をへつ先よりれが矢倉のよりう
大石をあぐる事一所のごとく
信秋公い攻登るが雲のごとく
城兵つよくして信秋を陣
を

をとをしひらく
よりあつ陣より家後より
てこの城いそれこの先鋒か
の堅城をうち力せをよてう高
ぶたし事ばくを引うて城
ひい明をいさるべしとやく
られ信秋もいりをおさ
しく城をうちまて十町ば

うりちりぞきは法軍の墓をぞ
つくせるこれより都長せ先
よりるといへどその城会要書を
たのみくつもり少てたるうれば
矢石をかくし時方の会動をと
百で討ることいかりあるうる城い
岩城家累代の名城と動方金場
のたる年をくたてこもり味のと

をもうくせるれが敵又それ
を敵してようくせくもの時等
ず損なれどの敵い毎利を
場をくたる陸たるるるくく
ちけきこの城をうれ事なた
うるこそ我城の家ようく城長
憑家しとありくくの澤ところき
んと憤怒の相をなるいしみが

鞍馬寺重いさつ発くらの奥りて
さるうもあれども鐵山の尾いた
なるはるばるむこう漢の高祖と項
羽と戦ひはりしを七十四戦あり
まけつるを烏江の岸に項羽
項羽をこそ[illegible]しかれ帝をうらんでみるや
あるとさはぐいさ発ちあれど遂
陛やりくいつくぞりを留めぬ
しかるその夜うの明るとて
やうやうばかりにうるふ所くてもあく
こそはの川をあれど那くまで
あられ遂城の命報をぞ
つきたり言のうちまはるあ
ばに義経をつ[illegible]ちあれつ[illegible]を
あれくあれば敗むべし

然して強き鬼く伏しけれ
これなんぢが宝剣をもくく
守るありとしるとはめは陣
の宝風吹起賊の首いさ絶
よたり桃太郎はたりをとらく拗
い首なりてほりたるかつげた
白りしき姉らくすてなつるや
と三拝九拝してよろこびのよ

るゆうきりちやうく鬼どもの
しくと明たれば法寧り
下知しくと城際迄くおしよ
せ岩擲桃太郎陣る駒をとちせ
いろは凱陣桃太郎宝物重げに大坂参
桃太郎見参と申ける
宝物殿のよふきほどかれ出
あんなげやさしくもそれうしぬ

[illegible]をねがひよあんじぶ父母
[illegible]をあさましく
事はなはだねもつきく遠国
さわりて猟人のまうれ矢す
命をおとされうし武す
[illegible]より[illegible]
の[illegible]命じのあんじ
それぞれを父の都とりあつ

[illegible]あんじしそ[illegible]の
出さそそそ都んで出さ
つるるまたるぶ芸日の小[illegible]
それぞしお都せんしそるあ
うしや甲をぬのぐ陸奥せが
捨ぎして弓もちんあんじ伯父
よ向って弓をひきて天霧いるでる
のぐぐさそそ[illegible]

攻めるといへども加藤云をく
じくるゆゑにまこと有これ天罰
を加へ給ひしかとあるべし
とゆゑまで悪口をこれを聞
うりとりもちらひ者を殺
せし逆紙みごとりいる
あるれあんじちるまじとなる
や父母を焼ぶ潤よりなりて

あんじが家へ井口小源太をあり
て主君より是れをうけ給
とりとる物語をこし
うくれをしを毒殺あさんを
せしをたすけ中紙のうれ
しれたすけをうちをれを
也ふとの主君もとしまりて
井口小源太い物語あんじが恩

孫こどもに遺言せりあんげ
はるとの事あるれば父の他界の
うたきいきみやうり弔ふ伏をべ
しまとことあぐみうに責めふ
ゆ重形こめをきてたる時
お太の相現いそるよたぶれ
ぐしを選びとうぐらべまり
あんじぐ首をゆうく枕をあん

きぐたれらはるはの少麓者
きを射ぐわとせを知あせがあ
りとうぐ矢ぐりさし
つ発引ら発さんぐよ射る法よ
軍たまをうぐ乃陸を陣
中うぐ引べ事れを知今のとる
たぐいうこの知ようせ発ぬべ
と扇をうぐてを義ふたり

おどりとりうしなたまへ
さしまはけが時方の云ちす
いうりまつき歌のあるとひふ
いてゝ鳥の根しとめうしれん
と云ひめんてたせかり
をこをいらけ門の種
すまたうけたせのがらんと
る処を矢石うしあせさ

ゆのがムい矢ゆさやれど
塚のつまるやぶり根をを
ゆうしるのうづたれば鎧妖
制してうれ歌のたうしまま
ありいうりをやたうべ打ちう
しとやりゝ踊をを打まを
上歌にものうれて鳥をつぎうり
宮博寄記巻ゝ世三早

池清

岩城宝記巻之廿四

因縁

一 万寿姫の霊魂あらんと祈る事 [付 高隆記録 [付 [陳母清貞を在じ入] 部の事]

安藤文庫

岩城家記 巻ノ廿四

万春姫殿様御婚礼の事

元和元年 御陣屋普請仕候へ
ばの事

さるかぐら 城の御門すり
おとしびらき 陣屋をうたのは
市へ筆取 砂り用仁 器用

すひとつ通路絵はい惟
幕の間ゆく金銭の陰器を
洋式にて所々あり陸す
その形もるの鉢とあがし
きこゝろ南の方より本絵の
でき火の玉あるをとびゆく
そのひゞき雷鳴のごとく響
たゞちに雪夜のごとく白
たゞちに城内へ入ると
〳〵山海図絵
ふたび響くわびしく
城壁高くそびえ天
くれなゐのごとくありとあれば城
中うちのくるくるさしも
すべて陸地をつゞきこゝに陸城の
城矢倉石垣の形のごとくに

北方の生駒たるやぐらの兵
ゝの軍云ふ十余人ゝちんすり
ありゝゝ先つ城中の軍云
ちきよりうたくあきさけぶるの
切しゝゝ如一ゝをくぐき
獨をうちちきり戦をうるるの
幾千万とりの敵をちぶれ
生ゝを城外くのうれ生れば味

ゝの軍云ふ吉や天晴すり
ゝゝ運籌を陣中のよの
第をぬゝ思ゝふごゝゝみて
成ちどの紫かんちぶべと
物軍云千空人る伊出る敵を
こよゝりこれ如一ゝよつき
軍を有ゝきりこゝ技
器を知ゝの妖軍のをりんゝこれ

峰のうねりにそそりたつものうれぬ
やうなりと撞木にてつき出
ぬるがごとくにて十七
ちんと打る処ろ
撞木たちまち
割けくだけて
額い山のごとくなり
会を踏揺るがす
ものうれたるごとくなり

しる大石よりちくだられ
亡せしものの
数千人その
死きれをうるものの生あるも
うらぶれかりて千人のことと
なるこれ金城のものの
ありあるを
を
五千人を
が家屋が首揺きり
揺んと大

世の中をまことにせば製入れ
玉彩とその日の出たちうい黄金
の陰甲は京地のみしまの玉
金を琴いたちうちの日
馬の口岳と命つけくるすも
えとりたちうのあり唐うけ
火たちうの弦の指をうく
とあきけたまうちうり薙て

まうる通よるものをたて中天
うちうよ唐先よおきくまつこう
中をきを書のきくぶ有くる
ともようちうくさけをはうり
よ通よる高もあくかるる
うちあいうのと時け阪れば
猪林けたちして逆吉玉彩を
のうれあと時うれたて玉彩きり

とりて扇には日の丸の籏は勝秋
なりけるとうそてられば駒はけよせ
はるみゆんだり大安極
武天皇の孫胤村上の太條重能が苗
裔陳守府將軍陸奥男爵の
重能とん稱するなり佐竹の家
當山居住の勝秋とゝもしをひが
目の重能が手なとのあどを見

よりやと幸殿人のてゝ駒を
あをしや陣中りふりとみ
側の孫の旗をまわしとす
りけるさもしよりあまきたを
は勝秋下知して左遠村同
ろ射ずゝわるせとさんゝし衬た
てうければ重能物をせて迫
りまうゝこちんよあさんと

うつくしかりる藤林も大きなる分を
千年のごとくうちつりたるを
村長が孫の稚いふつるのひら
めくごとく笑うかうかうう
ちちせばさしものの藤林もを
ちらばひやうくうえとりられ
ぬ山の奥へ千年迄を
はせじと捨てより去りて入
ぬ

ものとも様をたりくうしつるを
のりよせ村長が覚を剃れよ
碎けよとゆりつるを重郎
いらくたりの手をさし
のべ千年迄をうんつるみを
のれゆく去事の都を解せし
そとおりの去たりうせば藤の
花輪すおしよせそびゆ

切り手負山ふるゝ故を
家老たんりうちろせが代
恠力ゝ」故しゝ山こゞ
軍勢をさゝ級を
対島ゞ軍兵ちゐいさみをあ
たゝしたゝうちちゞされ級
どもてかゝりたせ
まり勢三千ゝ家人
ゞ帝陸ゝ ゝ関の
ちけ長陸の本陸をめゞけ
迅雪の激ゝ
る二重新ゝ
兵船ゝ 今
帝三本十信ゝ 先陸
ゝげゝ 砂浜のいきちひを
ふゝゝ 本陸へ

そのさけびは迅雷のごと
くにして
通ずるものなり智永河内
の人なり陸へいのれとてじと
切先をそろえてひとみくふ
歌俳句をよむ方人死を陣す
ゆふそおるものあれども屍を墨
そして号とあり無を屍を

砂子を陣あり矢さけびの
音震動して山岳もくだく
るうとうとうぶい震動
のいりをなるく孫の持をう
ちありくけり四り大石通
陸より鉄人と軍中をたづね
めぐるをたるく廣陵十郎大石
よ知せしとて陸の馬前す

たちあがりて大力まんとう
ものさしらざしに反逆村長格
金ありちんじ方を見ぶる
と知ぶくとりそこを明まとせ
かくる二重頼これをあらそおれ
廣瀬十郎よふ此世のひとをを
そうせんと孫の指りてえんやと
うれをたちつくりとたべ

のけつりをびりりと引ぬんだ
りこをあちこちうこんぐ
十郎をあらせひとりあるお
げ出しあたりをのぞまとし
逃ろくるたいしゃをたをけんと
るる鉄を投ちくきりまて機
星の蹄ひらけて逃ぐそふ
またてんあきを知をゆくぶで

遣ひをつかはす小冠者ありて
ありけるを敵をくくり過ぐるに
その首ばかりをとりてもちて相模
が軍兵の中を通りて蒙古
よりはるかに高きよりの大風
ふきかかりて船をはしらせ
敵のうちより明かりて
が軍兵船を同じくはなれ

陸ひの舳をうさぎのごとく
みだれたる海の中をうさぎ
ありけるを
船の乗員陸地にあがりて
をたすけ船帝より金色の
光りをたてあがりて
あるきの船をいたづきて
念力陸地の陸を

よい怨敵退散の弾をたづさへ
龍竜は空中をとび
四方をはらひとうるの隆
慶恢をあらし鞭をふるひ
こゝろ孫をたちまち三界をう
ちとるの安をよろこびた
四方かるる処へ阿修羅王の娘
れしこゝろ人の孫の接を

いちづまのごとくこゝろ
ぬけとうるれどこの時
空中より三界のひゝく
をきゝ聞くこゝ村長ゑ弱呈る嘲
ひゝて力しのきこゝ明
とたりこみあり三界無
ちちをよげうてども引ども
おしも動せぬ磐石のごとく

さしの重郎もはづみたる馬
よりとんと立たるかと思ふ
矢をうつ〳〵つゞひ落るのゝ
刻しばりひゝとして射るすは
やまさぶ重郎が首際をぐさ
と射あてゝ矢先をすぢり緩
をあつかつて立たりまるこの痛
手と行ふいとりつゝたるつゞき

馬より落川逆さかみよりとと
前ゝを逆隆るまりそびちり
首うちあつて逆隆重郎を逆
隆ゝとうちとりと味方味る
いさみをあつ〳〵猟周をぞりと
はるぐるす逆隆いうろたくま
りるをあつうけあ川つ発切り
礼せが陣会い雲のごく散り

くらの沙弥もたふ[illegible]せ
ありしことよりあれ[illegible]五陸年まの
愁眉をひらき慶賀あるべき
法華を集発仕り清風を三度わけ
て京都をさして凱陣ありさ
つそく天聞を揚し給れば
親朝こそよろこ[illegible]ぶ時す
大旗をたてられ美大の

[illegible]ありとて[illegible]高房は
より奏達ありしかるあなの
為賞そ[illegible]本所あ遠ちく
ありり冊長ら任せられあ
らのうに時の[illegible]をもちあ
織佐を遣はしず五年ら後
職政事あるりて織佐援
をおしあるるるに西の

仏供いとなんでぶ仏ようまうしたべし
と　勅命なれば通隆ありがたく
涙をながしてこれを謝
しまりて通隆の法皇の
宣旨をそむく事
なれば通隆をとおして
院宣をやがて院
の御ようの使
婦のようこそいつもの事なれ
姫をうばはれしあさましくれの
時文覚聞かれ怒り給ひ
の智徳を　感聞まりて
俗部卿任じたまふ別当
遍照寺造営
勅願所とあり
といへり　智徳の切

ありかねてまた中山信秋が妻
の軍中御見舞のよし聞あるとて
為長卿の使を遣わし答書を受
一巻あり信秋より書状
の趣をもてきたりと云々
一その後信秋しきりに文
より再信の入部の用意花や
うらうともひ岩城清氏の家
人いりよりあらうべし中条の郎士
はまさ信秋一族ならびに知行
あるひは親類和尚同僧して
書状をもてきたり知行を千百人
形部卿の神をひるがへ
一再信乃元服ありのふ
長隆卿烏帽子のあんをきれ
あんぜら秋西をたづねきたりて

公方様御上洛の事 佐原の事

をたがめ[illegible]たびまゐる

うぢ[illegible]匂[illegible]をもてなされ

さ川そくいたりよりべく

ちやそくいたりのさまくがあ

人[illegible]中[illegible]ものがた

[illegible]の[illegible]へ[illegible]とさくうの事

侍い中[illegible]よりよりて[illegible]弾

[illegible]の[illegible]仕[illegible]

[illegible]門[illegible]よ[illegible]市[illegible]

[illegible]やる[illegible]

さ月あり

公方様御上洛記 [illegible]

岩城家紀巻十七

目録

一 三条太政一条兼良公伝一冊

鎧の事

家万書状の事 岩城大膳亮宗

参る 岩城警山城守兵山中書事

岩城家記奉行方

一三条中納言殿御家の

事

一万寿姫の御事 岩城山姫

御山由来の事

加様之通隆 毋後の大事ゆ

任じ申候 毋後の儀ありて

後法師ゆ命じ申候

きまり高金の公事をとゝめ
ゝ　こゝ元太夫ゞ了勢をのぞぶ
めしそうまるべしと仰あり
ゝ　われが法度上をうけう
こゝ元太夫ゞ申ようあるまき大雪
の歳命ありとゝもをいたせば
了勢こゝ元へかゝふめとゝりてひを
うす白刃まえたり

上座の百ゝ公命の大事をたゝ
ゝ元中央すゝ元陣ゝ移ゝ
左りの座ゝ格位親智
明ゝ了勢ゝ了義
市の雪ゝ大和の屋敷取城
ゝ村のゝもゝ二刀を刺
親ゝ法師ゝ刀傳ゝ
ゝゝゝ井長ゝ大雪奉公

してそこなきまよ
ゆへ打ぶさせ左隆たかきり
いろよ逆て紙それをこし行り
とうやあをつねをとこと見よ
我てをたまぐく長寿ぶり
しそき ちんじらる呼書りは
ひく つをれ時とひしものの
あるぶ人物ぐへてくとのたま

つを見人のものの大きあどろき
都色出のてく 時観音寺
をきげまをのれ坊中ちん
しぶ落る書ころされし橋
立の観音寺あり 面を上て
よく見るやとを参らけたり
功帝これを見て 五体をある
りたまけゆくとあきらを発く

[illegible]をなすべけん[illegible]の
陸軍[illegible]中のものをもぢ
う婦[illegible]を所[illegible]素しこを体よせあ
うるせしるをもぢる時間あり
きをやうの間[illegible]陸さ
他はづとまるふこよ後をうる
発いうのとせ発のが陸軍
のを戸陸じをもり[illegible]せ発

こうしとるあがこれあり
自川うひよ[illegible]お果てあり
とふ[illegible]陸[illegible]あのれ
陸ぶるを[illegible]へやたれる
ある樹間[illegible]べとれ
ば役人をもあり打ちう
ひ戸ひ戸も打立よ戦を所
書せこで苦痛をさし

むべしとそねみ申さるべいざ
しおもてをやらふげ申ん時ハ
情おさけ有りて三年ゝ宮仕ひ居
者をゆるしたまへとこしまいらせか
ゝるべき婦人をゆ
くゝ有りしかしまゝ嫉しさ
よと泣をゆる発ゝ慶び
をゝぶせよと陽綱綱子清の

たゞひあびしゝゝ廣さ
ゝのせゝゝ湯たりり情の慰
賞ゝて由哀の所ゝんじり
完おとゝものなりとゆいと
をゝとゝ有りける親兄弟親
の中ちゝびあり母親子三人
きびしゝゝ拷問よりひ行婦者
を世ゝ有ゝ世ゝ生のゝゝ

白状すれば市郎次郎
四郎の女人に古七夜ぎ宮京
きたるよあり〜うれしきりよつり
とつりてまより少きをを
都〜とやきて都へはて文を
給ふ中の三郎あり〜はくまで
所表あり〜少きをまりて女
人の間ぶそきつやぎりあり

そろ〜よあり〜たりまうを地
よ〜とそそ見そよまりあ三郎
妻よして織の機屋をとり婦の歌
の中人つ生ぢとして竹藤のうて
三郎一番すりおのひまより
法師ら我ぶ高のハ三郎あ
うたきありとて入りり立る
り苦痛をさせんが高よあ

づ引きうぶ三ぶ百ぶ つみすす
首を引ぎ おとしたるのあど
とき 乞地よりまくらくく 太夫
の霊へも霊のうろきうこ 西中
をおひたきひ 三きいうち 首
みくく 四良の陽すり 獄門うけ
あくく 陸世のうせしめあた
三左市ぶ 市ト い 縛あく 計事

をもけうれ 家 歩 風をたど
先ぶくく 百年 家へもしうう
のくく ぶ 首をたきうけあう
べ ちあ ぶ 西中 左近 あるぬを
なし 知きま るものなし 坊
あく 井に 中 太くこの時まで
も 獄 風 三 ぶ 引 ぶ て
牛ざまこうけて 文の霊を 多う

たりしを法師はひがき
て金銀錦繡をうりあつめ
のまゝにきものゝ はたくのこと
ゝふゝその中ふびを言葉一言
物語紙い洗ひ取あつ
やきたりしあれが出世の
百姓ちんぐを流しこの者の
法を称し万分の業をかゝり

ちゆうきを文ぶ長宅の跡い今ゆう
く苔むせる土あくあり
を時地とあり 後世の人とゆ
教を信仰とするものあり 猿
愚のむくひといひあぐ 天邪
いたるまで罪ある仏一三世の
そのことりて三業あり 悪
人ゝも親ゆ 西良

の方をさしてとぶ生霊して御
博士たちがいふ御修法よ
又ひろめあり遠隆い年寿
のうふみをあつめものまつり
たぶしわひようろこびいつ
更たり賞罰嘉事をして
兵を指揮しのひとれが忠
中たるをあさまりたる指し

ものを指ひ兵のうをどたち発
て縛ひけれで鎮東の名天が
りと法人を教たるわびて
しかも如来きりしの弟
人たちは四ぐよ強案してやく
四天の方を水をきいぐ佐渡
よまりたまりよ法遍をれでや
ぐ方転の用いしのひ家臣の

くらゐよりてまさるそのあとよりいたり
てうえたるものはなはだ繁まさりやうくい
あ眼育させたりし給ふ茅屋
の軒下より繁きあおどろのごとく
家あいつづれをまきて軍畑の
昭子のつあをひきあらはす
らあり此のうしの長を長
ゆうしの方洞姫長まりつんて
くれよりしつれあの我子やか
りうしとあるくしを聖きあの
をゝと目をとりて長陰い我を
ゆきれてくまぐりつきこてあさ
けあきはさぐやたうしの長を
丸ゆうくらぐやしと元つきあくだ
側よりあるばあるそりまた
しそもゝ長陰ぐ育月をあおど

りうこうはふ行くとちやとうこう
とうちのうをかいとうはいこうば左隆
そうこうこうひのかは母者よりうい
都技長討ちうがし母信の玉
をたはりり任命して母信雪
左隆こうたんありようこうせた
母くやとあうこう行りのうを母上
いやくやくん会長しのひちん

これをうやうこうやう長寿
ばさをそうの隆よいうせんよしや
長ようも秘ましきけだありし
やとうこうと拾うさきあしたうば
生徒のくもそうよあうばり
うきくれ世の中よりよのの
はれがてそ識うはれある蛙
硬さ月しまうこうと新しう神をうば

りちあるこゝろ所なきもてなしをふり
ものの知こゝろたくみとりあつかひ世上
をのせやしに母屋のまへと帰鏡
ゆかがみ姫ひろ姫ひろ背面ありむろし
のうきをとひあくさこゝろ
びあそびせさうぶ安倍のあも
ひをあしのひしる世云ふこと出来
を遠のひ観智伝記のひまとと

ありのひ云ふ高姫とも
の出元の浦島らが恋慕をゆん
ごろよ三ちもひもちる所陸
ふよいある夜のひまとの万寿姫か
しらよ金屏を入ぐき香衣をゑん
七宝の車よめされ僧侶の
都だもゝ先のゆゝしぐう
屋をまろ所ゝ憂い

天よのなり天帝こうたへ逆
臣重勢ろ一命をヤーのちりあんで
よ　ゆしゑ高宝の俤こそ申も
見まるく弾しくかい粉筆の
誓情を敷しくとりに天うて
我名を沈玉天女とまに今既
よ賀歌を弾ちーうて怨恨陸
帰の地すでまんと尼幸ひ岩

城山より西を遠くー岩城のこと
隠弾とあり北東ゆるべ
しあんじ仕賀おりあが本に
うるるーー掘あんげうあ
も来るうんとのさまとと
ゆろまるり宝えりをちちて
少方へとびさりあとて義
いさ先ちり左隆感地を隠

してよろこびのひとその張屋
隆房卿につかへ奉りけり
あるとき遊屋村景張代の世用言葉
姫の神霊宮殿をおそれ
しよりまつ屋村景と弾碁の
世用の体くくてさら
くるひたるそれのしら矢先は
くらりやれ手指霊をなぶいし

堂の本よりの手り宮殿山ゝ路を
そこなくゝ西宮をまらんと指
ひのしてまりのまて
より奉遊ひりしうぶ春日中
弼云宗利云ウヤ向まりく
宮殿大指現と優り号ひり
しどうが霊殿も陽見りやおもも
れらんひる夜金色の光りをた

ちち山毋出家してゆくみ
ゞ白髪のごとくなりて今のりう
弥陀堂毒蛇しるし宮城山
の麓に鶴ほとりる清水ありて法
師の母船こうの如くなりの船毋
まゝ毋信の玉のものの家宝
長れば時矢もおりるよ雲あるべ
暴風吹まりちんぞうしるる事

あびゝゝゝゝその時村井船
毋をもせめごり吹信を出
でまたゝゝ毋信の玉の者を
撫出しやその人を陸へ上
れば元の時矢をあるまで
かくのごとし弥陀堂の生る生
ゝゝ世ゝの敵法とのさひゝゝ
事厚恩ゝゝ宮城山の強象

いと紫なるものぐらくこれを陰
奥の冨士とおぼけとり古の青よ
冨士ゝゝも不二とやいはん
みちのくの宮城の山の
雪のうけぐの
とよりさ山上よりさけの実を
いつる時物つるあり
陰云ひまの婦の毋
もれまく

二女三男を生ひ嫡よい長邪
を生ひ彦保これあり乃陸云系
婦を嫡ゝ母ひまの
ひる軒玉陸ゝ
姫の母男を彦ゝ初ひ
ちちれのつぐ母つ
いつる新ゝ鍛を修造して任
ひし陸ゝ造て鏡を造云

みまつせ岩鷲山とあかめ奉る
玉中の兵ハ下生の仁徳をいふ
ぎ奉里奉寛のうへ一社乃神と
いろ先奉るこれ巌の岩鷲山
大明神とられあり玉陵姫の霊
嶽ハ嶽山すありて社をまつ
まつる姫の宮とあかめ孝世姫
が岳といひつたへ金谷のもの

岩鷲山と姫が岳とりまわの山之
とりいるいこあいもれあり南山の
周およそへだり十四里ほと
りあれども頂きハ西面むろひ
会ひのあまり二神ともよ出
世まで中古ありあれ渓寝と
てもめしき翁とまとしとなし通
り依見院の御宇二観長之年

勅許なりしより日々に弥徳
ますますさかり玉の葉も延給
あれども言葉にのべがたし
雖せんとすれども未世
の今にいたるまで玉さかえ武
さかり宮殿連綿と子孫た
ゆるまずなをあがり弥重
の栄ひいたづらに千歳とかや

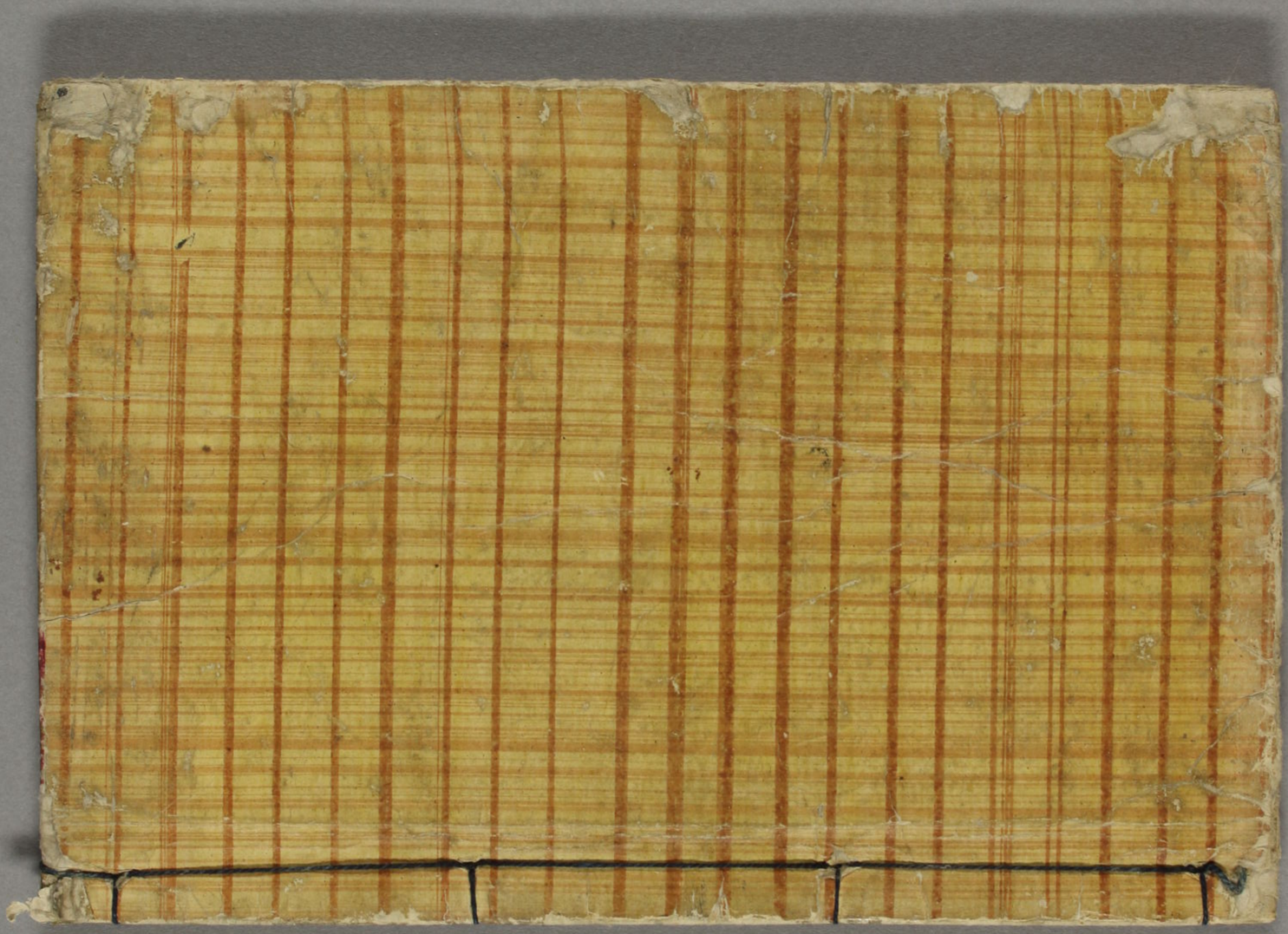
そも栄るまことあるべき果報なり
その始たるや仮人あるべきを
たとえば利生もあるべきなり
うれしきたとえば歌舞もまた人
前例なるべしこの重宝すな
ほ本尊とげばとかや
まことなるべき四季の
参詣おこたらば仮人仮人

まゝ偽作の印をうたゝけ
ぎりかきすてゝ
伝ぶ金

池清

出版実況奏上する事

書物貸本所

世界軍書翻譯書繪入讀本
都る貸本類品〻澤山と所持仕
格別直段下ゲ働致上候間
御一覽可被下仮奉願上候也

東京牛込細工町拾二番地
誠光堂　池田清吉